
ホットニュース(平成12年度／第28号)

●今月の業界ホットニュース／～魅力のある都市～

昨年発足した「都市観光を創る会」が、これからの都市観光を考えるに当たって、会員165名を対象にアンケート調査を実施し、魅力のある都市・訪れてみたい都市を聞いたところ、国内のベストスリーは京都、金沢、東京であった。魅力の理由は、常識的ではあるが、「街並み、景色がいい」、「食べ物、酒がおいしい」、「歴史・文化がある」、「時代の先端性にふれられる」などがあげられている。

一方ワーストスリーは、名古屋、大阪、川崎で、「潤いがない」、「雑多な感じ」、「個性がない」、「中途半端」などの印象を与えている。この結果を見た名古屋市の方は、東京のように交通渋滞はなく、車でどこにでも行けて便利で暮らしやすい街であることを強調されていた。

今、建設省では、モータリゼーションによって都市が拡散し、都心部が疲弊したことの反省から、モデル都市を選んで「歩いて暮らせるまちづくり」に取り組んでおり、また都市計画家協会では、「歩きたくなる都市の道100選」を公募している。

これまで都市計画道路は、車で走りやすい道づくりに追われてきたし、またその整備もまさに道半ばではあるが、併せて歩きたくなる道づくりを考えておかないと、道路は整備されたが、全国画一的な潤いも個性もない街並みができあがることになってしまう。やはり街づくりは、車のスピードでものを見たり、考えたりするのではなくて、歩くスピード即ちヒューマンスケールで考えていく必要がある。

(代表取締役 堀田紘之)

●話題の上越市に新しい副市長が誕生

アルメック都市計画部にも長年にわたって様々な形で、まちづくりのお手伝い・ご提案をさせて頂いているクライアントがいくつかある。その一つに上越市さんがある。上越市さんとは6年前、当時まちづくり政策課長の横田氏との出会いからおつき合いが始まった。

この間、氏の政策能力が芽をふき、次長、部長、局長へと昇進されていった。最近、定年を間近に控え「定年後は、ご実家の農業を思い切りやりたい」とおっしゃっていた。もともと事業畑の人で、色んな意味で“土”にさわることが好きだとか。

そんな横田氏が、先月13日付で環境部門の副市長に就任された。ご存じの通り上越市は、昨年7月に全国でも珍しい副市長制度を採用し、従来の部制を廃止し6人の副市長(地自法上は助役)を置くことで、組織の簡素化と、市長+副市長によるタスク・フォース形式による効率的な意志伝達システム化を図った。

氏は「環境で一番大切なのは生活していく市民。一緒になって取り組んでいきたい」と、市民生活に密着した環境行政を目指すとか。前任の副市長とはアプローチの方法が全く異なる。

氏にとって農業従事は少し先のこととなったが、現場で行動を起こせ、再び“土”をさわる機会を得られたことは同じ田舎人として嬉しい限りである。但し、仕事でのつきあいが少なくなることが寂しい。

(都市計画部長 高尾利文)

●クロスセクター・ベネフィッツでバランスある利益評価を

先週の弊社社内講習会は「LRTと路面電車」が取り上げられ、その中で、公共交通の採算性に対する各国事情も紹介された。我が国の「公共交通を黒字にすべき」という考え方は、世界的には特殊だという。世界的には公共財としての評価、雇用の評価などが市民権を得ているが、我が国では赤字は罪悪であり風前の灯火である。

公共事業の評価を適切に行うのは、是非とも必要な事である。が、世間の荒波に対抗すべく、現在精力的に進めている作業は、従来型概念の域を抜け出していないのではないだろうか。

環境部門や福祉部門では、近年クロスセクター・ベネフィットの手法（事業の利益について、単一部門だけでなく、影響を及ぼす複数の部門について、その波及効果や相乗効果を算定し総合的に評価する考え方、またはその調査・統計手法自体のこと）が話題になっている。我が国の建設部門でも早急に当該手法を位置付ける必要があるのではないか。

公共交通にはモビリティ確保に伴う福祉部門の便益も大きく、道路建設でも時間短縮、走行経費短縮、交通事故減少などの他にも様々な部門に関わる社会的便益がある。

単一部門では見えない社会的・総合的な利益について、定量化を急ぐ必要はあるが、むしろ概念の確立の方が重要とも考えられる。行政サイドは自信をもって住民の社会的利益のバランスを提唱していくべきなのだろう。

（第一計画室長 坂井雅子）

●緑を目にしながら歩きたい

前回、公園について書いたが、日中働いている人が、どれくらい公園を利用するだろうか？私とは言えば、残念ながらほとんど利用しない。たまに公園内を通過する程度である。サラリーマン等の場合、休日たまに利用することはあっても、ほとんど利用しないという人が多いのではないだろうか。

一方、私の場合、通勤や買い物の際に通る道路沿道の街路樹や植栽はよく眺める。芽が出た、つぼみが膨らんだ、花が咲いた・散った、緑が濃くなった、紅葉した、葉が落ちたと道端で季節を感じる。私にとっては、公園よりも道路の植栽や沿道宅地の緑の方が身近な緑であり、「うるおい」なのである。

そのため、公園整備とともに沿道緑化も一層進め、緑を目にしながら散歩気分ですら向かったり、買い物に行けるような環境づくりが実現できればと考える（時間に余裕があればの話だが）。

また、公共交通の利用促進面でも、車両や施設を快適で使いやすいものにするとともに、駅や停留所に達するまでの道路を快適かつ安全で歩きたくなるようなものにすれば、効果がより高まるのではないだろうか。

ところで余談だが、街路樹には外来種のものが多い。耐性や維持管理の問題からそうなっている面も多いと思われるが、欒、楠といった日本在来種の街路樹がもう少し増えれば日本らしくて良いのではと思うこの頃である。

（都市情報計画室 出ッ所幸子）